

南方系生物の出現

黒潮大蛇行が2017年9月より継続しており、5年近くになります。カジメ磯焼けの発生やそれに伴う痩せアワビなど、伊豆半島の磯根資源に大きな影響が出ています。大蛇行による影響の一つに南方系生物の出現があります。今回、ワモンダコとカタベガイについて記録しておきます。また、黒潮大蛇行以前からも出現の情報がありますが、同じく南方系生物であるヒョウモンダコについても併記します。

ワモンダコ：昨年11月に伊豆漁協南伊豆支所を訪れた時に支所長から「ワモンダコが獲れている。マダコがいなくなって、ワモンダコばかりになった。」との情報を得ました。具体的には「11月15日に潜りでワモンダコ18.2kg(8尾)が漁獲され、直売所で引き取った。大きさは3.8kg1尾、2.8kg1尾、平均2.3kg3尾、1.6kg1尾、平均1.5kg2尾。ワモンダコは下田市場に出そうと思ったが、弱ってきたので、明日まで待てられず、下田の魚屋に引き取ってもらった。値段はまだ不明。」というものでした。また、11月から見突きが始まりますが、白浜地区の見突き漁業者によると、タコはやはりワモンダコばかりであり、市場価格は鮮魚1,200円/kg、活し2,000円/kgだったそうです。さらに、中部電力とその関連会社が御前崎地区浜岡原子力発電所の前面海域でカジメの藻場造成に取り組んでおり、その潜水調査でもワモンダコが確認されているそうです(写真1)。過去の記録では、平成10年1月に南伊豆でワモンダコが採捕されています(分場だより271号)。

ワモンダコは南方系のタコで、沖縄で採捕されるタコはワモンダコです。斑紋がマダコと異なり、一見して判別が付きません。前回平成10年では1個体のみの記録でしたが、今回は漁獲され市場にも出荷されるほど大量に生息していること、伊豆だけでなく、御前崎地区でも生息があることから、大蛇行によって南方から稚仔の段階で大量に補給されたのではないかと考えられます。最大の大きさが3.8kgでしたので、タコの餌としてのアワビやイセエビなどの磯根生物への影響も多大なものと思われれます。



写真1 御前崎地区浜岡沖に生息するワモンダコ(テクノ中部堀内氏提供)

カタベガイ：年が明けた1月28日にいとう漁協伊東新井地区を訪れた時に、潜水組員が船揚場に落ちてきた貝殻二つを拾い、「この貝が増えてきた。名前は？」と問いかけられました（写真2）。貝殻はサザエのようにトゲ（棘）がある巻貝で、サザエと比べると上下に押しつぶした形をしていました。蓋はサザエのような石灰質の蓋ではなく、尻高（バテイラ）のような茶色の厚さが薄い蓋でした。図鑑で調べると、カタベガイでした。図鑑によってはサンゴ礁の貝として紹介されていますが、伊豆半島南部には昔から生息していた貝です。これまで分布がなかった伊東地区まで増えてきたのはやはり大蛇行の影響と考えられます。



写真2 伊東地区で生息しているカタベガイ（長谷川雅俊）

ヒョウモンダコ：6月24日に東伊豆町稲取にて素潜りをしている最中に、ヒョウモンダコを発見したとの情報がありました。ヒョウモンダコは10cm程度の小型のタコで、体表に青い斑紋を持ち、唾液腺にフグ毒と同じテトロドトキシンという神経毒を含みます。なお、太平洋側における分布範囲は房総半島以南といわれており、伊豆半島においても黒潮大蛇行以前から発見事例があります。

今回、ヒョウモンダコはアワビの殻の裏側で、卵を守っている様子であったとのことです。上記のとおり、分布範囲は静岡県も含まれているので、発見自体は珍しくはないのですが、卵を守っている様子が観察された事例は多くはなく、山手ら(2022)¹⁾によると山口県、長崎県、鳥取県、福井県での報告に限られています。しかし、分場だより第330号によると、平成24年5月に下田市白浜にて2個体が同時に見つかり、1個体がもう1個体に腕を伸ばしている様子が観察され、交接していた可能性が指摘されています。これらのことから、ヒョウモンダコは伊豆半島沿岸で再生産している可能性が考えられました。上記のとおり、ヒョウモンダコは神経毒を保有しているため、見かけても触らないようにしてください。

参考文献

1) 山手佑太, 豊増七奈, 竹垣毅. 日本国内におけるヒョウモンダコ *Hapalochlaena cf. fasciata* の分布. *Nippon Suisan Gakkaishi J-STAGE* 早期公開版. 2022.

(高田伸二)